

ヘスターとプシケー

—『緋文字』に潜む女性的心理発達のプロセス—

高 島 まり子

前稿⁽¹⁾で『緋文字』を男性的自我ディムズデイルの独立への元型的発達プロセスとして読むことの可能性を論じたが、それでは独立に至った「英雄—自我」としての彼の特質はどのようなものであるか、またそのような特質を備えた「英雄」の物語としての『緋文字』の意味は何かという疑問が残った。本稿ではこれらの点について検討してみたい。

まず一見して顕著なディムズデイルの人物像の特色はその受動性、消極性であろう。彼は第1章の「市場」において最初から「子ども」のように内気な若者として登場し、何らかの強い必然性に促されでもしない限りはできるだけ隅っこに一人で目立たぬように隠れていたというような傾向を示す。——「どこかに隠遁してのみ安心できるというような——心配そうな、びくびくした、なかばおびえたような表情があった。従って、自分の職務の許す限り、彼は薄暗い間道を歩き、自分を素朴なこどもらしくしていた。」⁽²⁾——たとえそのような傾向が秘かに犯された罪の結果であるとしても、本来彼が自発性よりはピューリタン神という権威への依存性の強い受動的な性質の持主であることは、第9章でも次のように述べられている。「どんな社会状態の中でも、彼はいわゆる自由思想の人物ではなかったであろう。信仰の重圧がその鉄の枠の中に彼を閉じこめながらも、彼を支えてくれているのを感じるのだが、彼の平和にとっては常に肝要であったであろうからである。」⁽³⁾このように消極的な「子ども」のような若者が前稿で論じたように「英雄」としての苛酷な心理的闘争を戦い抜き、ついに勝利を——彼自身の死という代償を伴うものであれ——獲得したということは、驚くべきことではなからうか。彼の7年間は、ベレロポンやペルセウス等のギリシア神話の勇敢な「英雄」の戦いとは全くかけ離れた悲惨な様相を呈している。「英雄」という呼称で呼ぶのがためらわれるほどに。にも拘らず彼が最終的にヘスターの誘いをはねつけ、告白を為しとげて、いわば本来の自己のアイデンティティーを獲得し得たのはなぜか。即ち「英雄」の条件である象徴的「父殺し」と「母殺し」を為し遂げ、自我の独立を果たし得たのはなぜか。その要因の一つには彼のいわゆる「動物的な特質」⁽⁴⁾が挙げられるかもしれない。それが精神的には大橋健三郎氏の言う「タフさ」となっており、⁽⁵⁾深刻な苦悩に満ちた7年間を生きぬくことを可能にしたのかもしれないのであるから。しかしその「タフさ」は、激しい内省と良心の苛責に耐える力とはなっても、彼の姦通から葛藤の7年間を経て告白に至るプロセスを方向づける推進力とはなり得ない。その方向づけとなった事柄、即ち物語の発端であるところの姦通とその発覚、そして告白への転機となったかに見えるヘスターとの森での再会をとりあげてみると、いずれも彼女の積極的な関わりあい抜きでは成立しないことに気付く。姦通については前稿で考察したようにディムズデイルに対する彼女の「太母」性の優位が考えられるし、罪の発覚も彼女の妊娠と出産が直接のきっかけであったと思われる。また森での再会は彼女の意志で計画、実行されたものであった。従って『緋文字』がディムズデイルによって

示される如く、西洋における男性的自我発達のプロセスを枠組みとして最終的にはピューリタン神への新たな帰依という優れて男性的な価値の世界の勝利を描いた作品であるにも拘らず、そのプロセスの要所はヘスターの体現する女性的な力あるいは価値によって押さえられており、同時にその女性的力こそが原作のプロットを推し進める力になっているのである。

以上のようなことが言えるとすれば、既に述べたディムズデイルの特色たる受動性、消極性はヘスターの能動性、積極性と不可分の関係にあり、受動的な彼の「英雄」への成長は能動的な彼女によってもたらされたとと言えるのではなからうか。逆に言えば、彼の受動性は彼女の能動性を保証しているのである。即ち作者ホーソーンが描いたものは、男性的な力のみによってではなく、女性的な力の決定的介入によって男性的価値が獲得されるプロセスであり、また自ら勇敢に独立を獲得する能動的「英雄—自我」ではなく、女性的な力に押しやられ促されて独立を果たす受動的「英雄—自我」の姿なのである。この点こそが「英雄」としてのディムズデイルの特殊性であろう。こうしてみると、彼は自ら主体的に敵に立ち向かうギリシア神話の「英雄」よりも、エリッヒ・ノイマンの解釈による『アモールとプシケー』の物語に登場するエロース、即ち恋人たる女性の行為によって受身的ながら「太母」アフロディーテの「息子=愛人」から一人前の男性へと自立するに至る若い神エロースのイメージに近いように思われる。そしてそのような視点からヘスターを見ると、いくつかの重要な点で彼女の役割がエロースの恋人プシケーのそれと重なり合うことに気付くのである。従って、本稿では視点をディムズデイルからヘスターに移し、ノイマン著『アモールとプシケー』とも比較検討しながら、ヘスターの側からプロットの展開を追ってみたい。彼女の女性的力がどのようなものであり、またディムズデイルの辿った精神的発達プロセスといかにからみあってプロットを動かす原動力として機能したかを解明することが、受動的「英雄—自我」の物語としての原作の意味を問うために有効だからである。

既に挙げた原作のプロットの流れを決定する2つの事件について、順次見ていくことにする。まず姦通の罪からその発覚にかけてのヘスターの関わり方は、どのようなものか。罪が彼女とディムズデイルを結ぶ「鉄の絆」⁽⁶⁾であると作者は述べる。ならば、この罪に対する二人の認識は一致しているのだろうか。注目すべきことは、姦通がディムズデイルにもたらした「原両親の分離」が自ら望んで獲得した「ウロボロス」的楽園（ヘスターとの恋愛以前の「共同体」）からの解放ではなく、否応なく押しつけられた追放であるということである。彼の心に浮かぶ「顔をそむけた母」と「聖人のようにしかめ面をした父」⁽⁷⁾の姿は、失われた楽園への彼の郷愁を示している。なぜなら対立していない一組の両親として捉えられているのは分離される以前の「原両親」、即ちヘスターとの恋愛以前の「共同体」のイメージであり、その愛する父母が共に現在の彼を非難していることは、彼を暖かく包含していた以前の「共同体」との一体感が既に失われてしまったことを暗示しているからである。彼の「原両親の分離」が不本意なものであったがゆえに、彼は分離した後の「原父」=「共同体」とも「原母」=ヘスターとも完全には一致し得ない「息子—自我」として両者から切り離された存在となっていながら、両者の引力から完全に自由になってはいない。実際は破ってしまったピューリタニズムの原理を依然として信奉せんとし、「共同体」の後継者たる優秀な牧師の地位に留まっていることは、「原父」との絆に彼がいまだにしがみつこうとしていることを示す。同時に、彼女が処刑台でさらしものにされる「市場」の場面におけるおどおどした彼の「子ども」のような姿や、「恋する太母」から逃げ回る「息子=愛人」としての未

熟な反抗を意味するマゾヒスティックな苦行、その心理段階の本質的特徴である「自分自身を意識化し始めた自我と意識……が自らを鏡に映そうとする傾向」⁽⁸⁾を示す——ナルキッソスのような——鏡に向かっての徹夜、そして世間の疑惑を招くような立場でないにも拘らず不可解なまでに彼女との接触を避け続けた7年間等が、「原母」=「太母」としてのヘスターとの絆を彼がいまだにひきずっていることを暗示している。元来、姦通そのものが彼にとっては「情熱の罪であって、主義の罪でもなければ目的のための罪でさえも」⁽⁹⁾なく、チリングワスにとっては遺伝性と思われた「強烈な動物的性質」によってひき起こされたもの、即ち「太母」の支配力に翻弄された結果であるとすればこのような「原父」、「原母」の支配力の持続も当然であろう。

それではヘスターにとっても同様に、姦通は性的情熱のゆえに我を忘れて犯した罪であり、その結果は不本意な樂園追放であったのだろうか。あるいは彼女はディムズデイルの妄想に現われる通りに「少年自我」を性的魅力で破滅させようとする貪欲な「太母」であり、「共同体」の定義通りの「緋色の女」、「バビロンの女」⁽¹⁰⁾であったのだろうか。実際は、そのいずれでもないように思われる。彼女が女性であるがゆえに妊娠と出産を経たため、罪の発覚を免れず罰せられたことを除いても、罪の受けとめ方についてディムズデイルと彼女の出発点がかなり異なっていることは事実であろう。不本意な「原両親の分離」⁽¹¹⁾の後、彼は「原母」の支配力に抗して「息子=愛人」への退行の危険と戦い、「炎の舌」を受けられた天使の如き有徳の牧師という虚偽のペルソナを「原父」=「共同体」から押しつけられてその重圧に喘ぎつつ、前稿で考察したように「太母」の手先としての「地父」元型の性格を持つ復讐者チリングワスの精神的拷問に耐えることに精一杯である。ヘスターへの思いやりが示されるのは、苦悩と孤独に耐える日々の中で彼女がごくまれに「苦悩のなかばを分かちとってくれる」⁽¹²⁾ような視線を感じるという間接的な表現に暗示される彼の同情心と、彼女がパールの養育権を巡って知事達と対立した際に、彼が（彼女に請われてではあるが）見事に彼女を弁護して母子が引き離されるのを阻止したことくらいであって、ヘスターの引き受けた苛酷な運命を考えれば、あまりに微々たるものであるという印象はぬぐえない。彼の意識は自分自身の内部にのみ集中していると言えよう。ヘスター母子の存在を公衆の面前で受入れ、彼なりの愛を示すことができるのは、「竜との戦い」を終えようとする告白の場面であって、既に死が目前に迫っている。それにひきかえヘスターは、第3章で処刑台の上で恥辱に打ちのめされそうになりながらも姦通の相手を告白することを断固として拒否し、「その人の苦しみも私と同じように耐え忍びたいものと願っています」⁽¹³⁾と罪を一身に背負って一歩も引かない。しかもその後の孤独な7年間に恥辱を背負って忍耐の日々を送りながら、女手一つで彼との間に生まれた不義の子パールの養育に全力を傾ける。その間、第5章で彼の微かな視線にさえなぐさめを感じ、死後の世界で罪の絆によって彼と結ばれるという最少限の望みすら罪悪感で抑圧しようと努める彼女の姿は、いじらしいほどである。また第12章で夜の処刑台で救いを求める彼の衰弱した姿を見るなり、愛情と責任感からチリングワスにかけあって彼の解放を頼みこむ彼女の姿が、第14章に見られる。また自分は彼の命を救ったのだと豪語するチリングワスに反発し、ディムズデイルが解放される見込みがないと解ると直ちに彼の正体を知らせようと決意し、実行に移す。第17章の森での再会の場面に描かれるように、彼女にとって「共同体」の冷酷さはおろか神の怒りでさえも、ディムズデイルの怒りほどには耐え難いものではなかった。彼女には、一貫して彼への変わらぬ強い愛情と献身がある。このような過酷な試練にも耐え得る愛と献身を

考えれば、彼女にとって姦通が忘我の内に犯した肉欲の罪に過ぎないと断定することはできまい。しかも彼女には、原作のプロット以外にも行動の選択肢はいくつかあったはずである。原作にも「共同体」の課した罰など無視して出身地ヨーロッパに戻るか、荒野に逃げ込んでインディアンと同化する等の可能な選択を拒否した彼女の心理をあこれ分析した箇所があるが、⁽¹⁴⁾それらは彼女の出産後、罪が発覚した後についてである。それ以前の様々な行為の可能性を考えれば、彼女の選択の幅は更に広がったはずである。例えば、「共同体」の冷酷な糾弾を避けるため、妊娠を知られぬ内に逃げ出すこともできれば、実際に「バビロンの女」のタイプならば、いったん他所で出産した後、我が子を手離して何くわぬ顔で恋人の所に戻ってくることも、そして罪を重ねることもできたであろう。にも拘らず、彼女が出産してそのまま「共同体」に踏み留まったということは、当然ながら罪の発覚の結果としてどのような厳罰を課されても、それを受け入れ耐え忍ぶ覚悟があったことを示している。その罰が死刑であった可能性もあることが第2章の女性達の会話の中にも言及されていることを考えれば、彼女の選択には死の覚悟すら含まれていたと言えよう。姦通の結果プロットの上で生じたことは、避けようと思えば避け得たにも拘らず、彼女自身が受け入れることを意図的に選択したことなのである。従って、ディムズデイルの場合とは違って、姦通の結果もたらされた過酷な状況は、彼女にとって決して全面的に不本意なものではなく、むしろそのような犠牲を払っても——命とひきかえであっても——なお求めたい何か、あるいは主張したい何かがある彼女にはあったのだと考えるべきであろう。

以上で明らかなように、彼女にとって姦通が「情熱の罪」というよりディムズデイルに対する一貫した愛ゆえの行為であるらしいこと、その結果が不本意な楽園追放ではなく意識的な選択によって引き付けられたものだということの2点は、姦通に対する彼と彼女の認識に大きな断絶があることを明確に示すものである。この「愛」と「意識」の二つの要素こそ、ノイマンがプシケーの生涯に見出した女性的な自我確立の元型的プロセスの中心たる要素であろう。そしてヘスターとプシケーを比較した場合、前者の姦通が、無意識の暗闇の世界に意識という光をもたらした後者の英雄的行為——プシケーが禁を犯して暗闇に横たわる夫エロースの姿をランプで照らし出して見るという行為——に匹敵するのではないかと考えられる。これについて論じる前にプシケーの自我発達プロセスをノイマンの解釈に従って要約してみよう。

ノイマンによれば、それまでのプシケーは娘時代の母娘一体化した「自己保存」の時期から「怪物」——実は目に見えぬ神エロース——との「死の結婚」に始まる「父権的ウロボロス」の時期に入っていた。前者はデメテルとコレーの神話に見られるように、乙女が「太母」と一体化し母性的無意識の状態にある平和な時期だが、後者の時期にはそのように無邪気な乙女が新たに強力な無意識的内容に征服され、それを圧倒的な男性性として自己放棄によって受け入れるため、完全に受身的な女性としての自己認識を獲得する。これは神話ではハデスによるコレーの略奪や、ゼウスとダナエーの場合のような神の処女に対する一方的な関係に描かれてきた。プシケーは、姿の見えない夫によってもたらされた暗闇の楽園に身を委ね、最初は満足していた。しかし姉達にそそのかされ、夫の実際の姿が果たして怪物であるか否か自分の目で確かめ、もし怪物ならば殺害しようと決意し、夫に禁じられていたにも拘らず眠った夫の枕元にランプをかざして彼の姿を見てしまう。この時、それまでの暗闇の楽園、即ち「父権的ウロボロス」としての姿の見えない夫エロースといまだ「太母」の支配下にありながら彼に身を委ねて

いたプシケー自身とが一体となっていた無意識の世界は分離解体され、プシケーはその「原両親」の真中に自我意識として誕生したと言えよう。そして「見ず知らず」⁽¹⁵⁾の関係のままに自分を委ねていた夫エロースの姿を確認し、初めて圧倒的な力としての彼に屈服するのではなく、個別的存在として彼を意識的、主体的に愛し始めるのである。

さてヘスターの場合もプシケーと同様の心理的プロセスを歩んできたことが、第1章の処刑台の場面での彼女の回想から推測される。罪の発覚以前のいわば『緋文字』前史とも呼ぶべき時期について考察してみよう。イングランドの両親のもとで過ごした乙女の美に輝く幸福な少女時代は、愛する両親の姿として捉えられる「ウロボロス」=「原両親」の段階であり、とりわけ「母の顔…その注意深い気づかしそうな愛情の表現は、いつも彼女の思い出の中であって、母が死んでからも、娘の歩いてゆく道すじに立ちふさがって優しく叱責することがしばしばあったのである」⁽¹⁶⁾と愛に満ちた母親の姿が強調されているのは、次の段階である母娘一体化した「自己保存」の時期に相当すると思われる。(図[I]の(A)参照)そして、年長の学者チリングワスの妻としてアムステルダムで過ごした日々は、「父権的ウロボロス」段階——まだ「太母」の支配下にあって一人前の女性として成熟していない乙女が、圧倒的な男性的支配力を自己放棄によって受入れる「死の結婚」と、それに続く無意識的な楽園状況——に当たるのではなかろうか。チリングワスが、日中は書齋に象徴される学問という俗世間から隔絶された権威の世界に閉じこもり、夕暮れ時になると彼女と共に時を過ごすために姿を現わしていたのも、エロースが日中は天上の神々の世界で過ごし、夜だけプシケーと共に過ごしていたのと通じるものがある。即ち、チリングワスもエロース同様に昼間の個人としての意識的存在を妻と分かち合おうとはしないし、昼間の個人としての妻の存在は、彼女自身にとっても彼にとっても無に等しいのである。即ち、彼の実際の姿(アイデンティティー)はヘスターには見えず、彼女の真の姿もまた彼には見えていない。いや、彼は見ようとしなかった。彼にとって彼女は、「長い時間を一人淋しく書物の中に過ごしたために生じた冷たさを学者の胸から取り去るためには、その微笑を浴びることが必要」⁽¹⁷⁾という存在でしかなかったのである。つまり、二人の結びつきは、エロースとプシケーの場合と同様に、「見ず知らず」⁽¹⁸⁾の関係に過ぎなかったのである。「彼のなまぬるい手に握りしめられることに耐え、またそれを握り返し」⁽¹⁹⁾、「彼女の唇や目に浮かぶ微笑を彼のそれとからませ、溶け合わせ」⁽²⁰⁾ていたチリングワスとの結婚生活が彼自身「まず悪いことをしたのはわしだ。おまえの蕾の若さをだましてわしの衰えと偽りの不自然な関係を結ばせたのだからね」⁽²¹⁾と述懐するようにアンバランスなものであったにも拘らず、「かつて一度も幸福以外のものと思われたことはなかった」⁽²²⁾ほど、ヘスターは彼の存在に圧倒された無意識の状態にあったと言えよう。当時の無邪気な彼女にとって、彼が年令の上でも知性や教養においてもそれほど巨大な存在であったのは当然であろう。彼は「生まれた時からできそこないの体だったわしは、若い娘の気持ちでは知的な才能があれば肉体の不具も隠されだろうなどという考えに、どうして自分をあざむくことができたのだろうか」と過去の自分の認識の甘さを自己批判するが、実は彼の「知的な才能」が「肉体の不具」を隠すことは可能であったのであり、確かに知力による彼の絶対的支配が実現していたのである。姦通による彼女の「自我意識」の獲得が無ければ、その状態はずっと持続していたに違いない。しかしノイマンが述べる如く、そのような無意識的な楽園状況は「隷属的で盲目的状態」⁽²³⁾であり、そのような存在は「非存在、または暗闇における存在、即ち怪物に飲みこまれたもの」、「いけにえ」⁽²⁴⁾な

のである。(図 [I] の (B) 参照) 罪の発覚から7年を経たヘスターにとって、その頃の「幸福」が「彼女の最も醜い思い出」⁽²⁵⁾へと変わり果て、「彼女の心に分別の無かった時に、自分の側に居るのが幸福だと考えるように彼女を説きつけたこと」⁽²⁶⁾の故にチリングワスを憎まずにいられないのは、彼女が当時の「父権的ウロボロス」の無意識の段階からその隷属状態を認識し得る意識的段階へと前進したことを示している。いや、最初の処刑台の場面の直後、監獄で彼と再会した彼女が「少しも愛は感じませんでしたし、そんなふりもしませんでした」⁽²⁷⁾と言っていることから、姦通を経て既にその段階に達していたことは明白である。もっとも心理発達に沿って考えれば、彼女が「愛」を感じなかったというのは真実の愛を知った後の感想であって、当時は「愛を知らなかった」と言った方が妥当であったろう。真に愛し得る主体としての「自我—意識」がいまだ誕生していなかったのであるから。

ではチリングワスの君臨する樂園から上記の意識的段階に至るまでの彼女の意識発達プロセスを、プシケーの場合と比較しつつより詳細に見ていくことにする。まずプシケーの場合、暗闇の樂園の主と彼女がランプで照らし出して見た愛の対象は同じ夫としてのエロースであったが、ヘスターの場合は二人の男性が関わっているという相異点がある。最終的な愛の対象はディムズデイルであるが、「父権的ウロボロス」の支配する樂園の主はチリングワスからディムズデイルへと途中で交替したからである。厳密に言えば、彼女の場合、暗闇の樂園自体が一つではなく、ヨーロッパ在住の時期のチリングワスとの結婚生活と渡米後の「共同体」での生活とに二分されると言えよう。前者は地上的、知的な性質——これについては前稿で、チリングワスの医者としての知性の地上的特質を考察したが——を、後者は天上的、霊的な性質を持っている。これらの性質は男性的文化価値の二つの面を表わしているのであるが、いずれも「自我—意識」として誕生する以前のヘスターを支配する、巨大で圧倒的な世界である点に変わりはない。しかも彼女を「共同体」へと送り出したのはチリングワス自身であり、彼もまた敬虔なピューリタンとして「共同体」に加わったわけであるから、彼女にとって二つの世界は最初は重なり合っていたわけである。チリングワスの支配下から突然無防備なまま一人で「共同体」に放り込まれた彼女が、夫の君臨する世界とは性質が微妙に異なっているとはいえ、同様に圧倒的な支配力を振う男性的価値の世界を、ただひたすら受入れ服従するしかなかったとしても無理はない。夫と離れて一人になっても、「いけにえ」としての状態に変化はなかったであろう。(図 [I] の (C) 参照) そんな彼女にとって「共同体」を代表する絶対的権威として現われたのが、優れた聖職者としての天分と宗教的情熱に恵まれた彼女の教区牧師ディムズデイルであったに違いない。いわば彼は、「共同体」という暗闇の樂園の主として彼女を支配し始める。一人ぼっちの彼女は、今や夫に捧げていた盲目的な崇拜の念と自己放棄の姿勢を彼に向けることになったであろう。そのような女性の姿を我々は20章に見出す。森でヘスターと再会し、逃亡の約束をしたディムズデイルが家路を急ぐ途中で出会う、教会員の内で一番若い女性の信者である。彼女は「樂園に咲く百合の花のように美しく、清らか」で、「汚れない清浄無垢な心の中に」彼を祭り、「信仰に愛の暖かさを授け、愛に信仰の清らかさ」⁽²⁸⁾を与えていた。いまだ「太母」の支配下にあって生身の男性と個人的に出会うことのできない処女が、彼の宗教的偉大さに征服され、支配されている様子が読みとれる。この乙女に対して彼の持つ支配力は絶大なものであり、「牧師がただ邪悪な顔つきをしさえすれば、その無垢の心の花園すべてを枯らせることもでき、たった一言であらゆる悪を彼女の心に広げることでもできると思われた」⁽²⁹⁾ほどである。実際彼が気のつかぬふりをして通りすぎ

ただけで、彼女は無視された自分自身を一晩中責めたてずにいられない。それほど彼に支配されている彼女こそ、「怪物」である彼に「いけにえ」として飲みこまれた「非存在」の状態にあるのではなからうか。彼女の良心が「まるで彼女のポケットや裁縫箱のように無邪気なちっぽけなものに満ち満ちている」⁽³⁰⁾と述べられているように、彼女はエロースを「高貴な夫」⁽³¹⁾とみなす「何も知らない子供っぽいほど無邪気な少女」⁽³²⁾であった頃のプシケー同様、「父権的ウロボロス」の完全な支配下にあり、ヘスターとの逃亡の約束によって「内面の王国において王朝と道德律がすっかり変わった」⁽³³⁾その時の邪悪なディムズデイルのことさえ、「神」の如く崇拜することしかできない。既にチリングワスと結婚していたにせよ、一人で渡米したばかりのヘスターが、夫に対して従来この乙女と同様の「隷属的な盲目の状態」にあったとすれば、その隷属の対象が夫からディムズデイルへと変わった後は、まさにこの乙女にも比すべき彼への「いけにえ」となったに違いない。彼女を飲み込んでいた「怪物」はここで夫からディムズデイルへと交替したのである。こうして依然として「父権的ウロボロス」段階に留まっていた彼女を、禁を破って姦通に至らしめた動機は何か。この段階に封じ込められたままの無意識の状態であれば、彼女は圧倒的な知的存在であった夫や、神の如く聖なるディムズデイルへの崇拜と自己放棄の姿勢から一歩も踏み出すことはなかったであろう。そのような状態のまま年老いた婦人の例が、第20章で先ほど例に挙げた乙女と出会う直前に、やはりディムズデイルが出会った信心深い模範的な教会員である老婦人⁽³⁴⁾に見られる。彼女は、彼への絶大な崇拜の念のゆえに、「人間の靈魂の不滅に反対するような」言葉を彼に囁かれても、彼の言葉が混乱していたためか、「天の都の輝きにも似た神々しい感謝と恍惚の表情」⁽³⁵⁾を浮かべている。彼女には、彼の実像を見きわめる力はない。彼女に対する彼の支配力は、そのような不信心な言葉を彼女の心に注入すれば、「激しい毒物を注入する効果と同様、この老女はたぶんたちまち倒れ死んだことであろう」⁽³⁶⁾と述べられているほどである。ヘスターも「父権的ウロボロス」段階に留まったまま年老いたとすれば、この老婦人のようになったであろう。また罪の発覚後の「共同体」が非難する如く、彼女の動機が動物的、本能的な肉欲のみであれば、既に述べたように行為の結果の受け取め方が、かくも意識的かつ積極的なものとなり得たはずはない。従ってその動機は、「父権的ウロボロス」段階の無意識の状態から意識の世界へ一歩踏み出そうとする彼女自身の心理発達への衝動ではなからうか。

プシケーの場合この衝動は、姉達の介入という形をとって現われる。姉達は女性が男性性に屈服することを許さず、男性への敵意を顕わにする母性的傾向を体現している、とノイマンは述べる。姉達は、彼女の夫が恐ろしい大蛇に違いないのだから飲み込まれない内に殺してしまうようにと彼女を説得するのだが、ノイマンはこの姉達をプシケー自身に内在する母性的傾向を示す「影」であると解釈する。この「影」は、「父権的ウロボロス」段階の前段階である「自己保存」段階の母性的傾向を示しており、「父権的ウロボロス」による男性的支配に抵抗しようとして、両者の葛藤をひきおこすというのである。心理発達における新しい段階への移行は、常に前段階の抵抗を伴ない、両者の葛藤をもたらしものだが、「父権的ウロボロス」段階への移行は「自己保存」段階を支配する「太母」の抵抗を呼ばずにはいないのである。こうしてプシケーは、姿を見せることを徹底的に拒否する夫を前に、暗闇の樂園に安住し、今まで通り優しい夫に服従しようとする気持ちと、決して彼女と向かい合おうとしない彼への疑念や不満との葛藤に苦しんだあげく、姉達の忠告に従おうと決意する。しかし、ノイマンが説くようにこれは

「太母」の支配下への退行ではなく、女性の心理発達全体を展望すると、最終段階への前進の一步として作用しているのである。なぜなら、姉達の介入によってプシケーは初めて暗闇の樂園を「とても心地よい牢獄⁽³⁷⁾」と感じ、怪物の「いけにえ」にも等しい自分の「隷属的で盲目の状態」を意識し始め、「光と知識を求めようとする衝動は耐えがたいもの⁽³⁸⁾」となるからである。そして姿を見せない夫の顔を見たいと願って彼に「私の生命の光⁽³⁹⁾」と呼びかけて慕いながらも、彼女の切望に耳を貸そうともしない夫への反逆という思いきった行動に訴えたのであるから。その結果、彼女は無意識から意識への扉を開き、暗闇の樂園は解体したのであるから。ノイマンが姉達の「反男性的な、またきわめて残忍な扇動」を「プシケーの状態と態度とに対抗する女性の真の抵抗、より高い女性としての意識の始まりを具体的に表現しているものである⁽⁴⁰⁾」と説明する通り、ここに「影」の作用の建設的な側面が明白に表われている。即ちプシケーは、「影」の介入によってまず「自我意識」の目覚めと個人としての愛の芽生えをもたらされ、その両者から生まれた「夫の真の姿を見たい」という切実な望みを拒否されて「太母」性と「父権のウロボロス」の葛藤に悩んだ末、前者に押される形で「原両親の分離」という新しい段階へと前進し、「自我意識」の誕生と意識的な愛の獲得に到達したのである。結局、意識性への欲求に根ざした「太母」的反逆は、「太母」への退行にはつながらず、意識段階への前向きの反逆となったのである。

ヘスターの場合、暗闇の樂園である「共同体」を「牢獄」と感じさせ、彼女の状態を「怪物に飲みこまれたもの」と意識させるような「太母」的な「影」は、ヒビンズ女史に象徴される魔女であろう。ヒビンズ女史は、森での悪魔との契約を通して動物的、本能的な生き方へと人々を誘惑し、第8章にも森での悪魔との宴に誘おうとヘスターに声をかける場面がある。彼女の崇拜と服従の対象は悪魔であるが、彼女の動物的、本能的価値観は自然界を支配する「太母」性に通じるものであり、彼女はいわば「太母」の否定面を体現していると言えよう。「太母」の否定面を表わす彼女が、「父権のウロボロス」である「共同体」の霊的支配という男性的価値観に抵抗するのは当然であり、そのような立場の宗教的表現が、悪魔と契約して神に反逆する魔女という存在なのである。従って、彼女は神に反逆し、神の意志を地上に実現せんとする「共同体」を「牢獄」と感じ、自分を捕われの身と意識する。同時に、「共同体」を代表する牧師達を、自分を支配し飲みこもうとする「怪物」と感じて反発するのも当然である。ただし、現に「共同体」が自然な人間性の抑圧や厳格すぎる戒律、そして冷酷きわまりない懲罰等の過度の支配力を振うようになると、ヒビンズ女史のような魔女の視点は、確かに一面の真実を含むことになる。それは、プシケーの「いけにえ」の状態を言い当てた姉達の忠告が一面の真理を含んでいたことに等しい。こうして彼女の存在が、「共同体」のピューリタン神権体制の欠点、あるいはその体制による過度の男性的支配力を告発する「太母」的な「影」の声として、ヘスターに自分の「いけにえ」の状態を意識させる役割を果たしたことは十分に考えられるのである。このような「影」の介入が、ヘスターに「自我意識」の目覚めをもたらし、神の如く近寄り難いディムズデイルへの接近を求める願望、即ち彼が姿の見えないエロースの如く手の届かない絶対的な崇拜の対象から、人間として対等に自分と向かい合う個人へと変わって欲しいという願望を生み出したのであろう。これは人間的な愛の萌芽であると同時に、対等の個人として彼と向かい合うことによって、彼女自身が「怪物」に飲みこまれた「非存在」の状態から脱出せんとする意識性への欲求でもあるのだ。そのような切実な願いが拒否された場合、彼女の内

部にもプシケー同様の葛藤が生じることは明らかである。即ち神の如く高貴なディムズデイルをひたすら崇拜し、自分を委ねて「非存在」に満足しようとする気持ちと、その状態を「怪物」に捕われた「隷属的で盲目の状態」と感じて反発する「影」の意志との葛藤である。プシケーが「同じ一つの（エロースの）体の中で獣を憎み、夫を愛した」のと同様に、ヘスターもまた、ディムズデイルという一人の男性の中の自分を飲み込んでいる「獣」を憎み、「神」の如く高貴な男性像を愛したのである。（図〔I〕の（D）参照）このような葛藤の中で、プシケー同様にヘスターにおいても「自己保存」段階の母性的な力、即ち「影」の意志が優位を占め、プシケーが怪物退治に乗り出した如く、ヘスターは「父権的ウロボロス」の「牢獄」をはねのけ「非存在」から脱出するため一気にディムズデイルに生身の女性として向かい合った、それが彼女の姦通の実体であったのではなかろうか。即ち彼女にとって姦通の直接の動機は、「父権的ウロボロス」段階の男性支配への反逆なのであり、具体的にはディムズデイルの態度への不満と疑惑であり、彼の背後で彼を規定している「共同体」のピューリタン神権体制——彼女を「共同体」に送った信徒としてのチリングワスも含めた——への抵抗なのである。（図〔I〕の（E）参照）従って、この時点で既に彼女が一人前の女性としての成熟した愛を持ち、その愛と情熱のゆえに姦通に走ったという理解はあまりに表面的すぎる。姦通以前の彼女は、「父権的ウロボロス」段階を打破し得るほどの決定的行為を為し遂げてはおらず、それゆえ真の愛を体験し得る主体たる自我はいまだ完全に誕生してはいないからである。にも拘らずヘスターの反逆が、一見すると愛と情熱の結果であるとか、自然な生命力や情念の発露、更には肉欲に負けたための誘惑行為であるというように誤解されがちであるのは、それがプシケーの場合のように武装した上での怪物退治といった男性的様相を呈しているのではなく、姦通という性的行為だからであろう。両者のこの相違の理由は、プシケーの場合は、「父権的ウロボロス」たる愛の神エロースが「太母」たる女神アフロディーテの「息子＝愛人」であり、それゆえ彼の君臨する暗闇の樂園が「太母」の性質を持つ非常に性的な恍惚の世界であったのに反し、ヘスターを閉じ込めた「共同体」は、「太母」の世界とはまっこうから対立する精神的、霊的な世界だからである。従って、プシケーの意図した反逆が、短剣で武装して性的世界を破壊しようとする男性的な殺害行為であったのとは逆に、ヘスターの反逆は、霊に対する肉の挑戦という——美しい肉体と激しい情念といった女性的な武器を用いた——性的な形をとらざるを得ないのである。そのために彼女は、「共同体」から「バビロンの女」、「緋色の女」とみなされ、墮落した情欲の化身として扱われるのである。しかし、プシケーの反逆がより高い意識性への渴望から生まれたものであるがゆえに、ダナイデスによる男性の去勢と殺害に見られるような「太母」の支配下への退行につながらなかったのと同様に、ヘスターの反逆の根底にも意識性への欲求、即ち「非存在」を脱却して「光と知識を求めようとする衝動」が息づいていたからこそ、姦通という「太母」的反逆が退行ではなく意識段階への前進につながっていったのではなかろうか。

以上のことを裏付けるべく、姦通の結果を考察してみよう。まず言えることは、彼女の反逆の根底に意識性への渴望が無ければ、「共同体」の神権体制とその優秀な後継者たるディムズデイルへの「太母」的反逆である姦通は、「太母」の支配下への彼女の退行に終わったであろうということである。そうなれば、前者への反逆は「共同体」の体制を根底から覆えそうとするヒビズ女史のような魔女としての行為へと発展し、後者への反逆は誘惑としての性質をあらわにし、姦通の相手としてディムズデイルの

名を暴露して彼を神聖な地位からひきずりおろし、罪の仲間としての刻印を分かち合うか、あるいは自ら魔女となり、彼を「強烈な動物性の性質」を持った神への裏切り者として仲間に入れ、精神的に破滅させることになったであろう。ところが実際にはそうはならなかった。既に述べたように、彼女は自ら魔女として「共同体」を脅かすどころか、ディムズデイルの名を告白することもなく、彼に対するいじらしいほどの愛情を貫いたのである。逆に姦通が彼女の意識段階への前進につながったことは、既に見たチリングワスとの結婚生活の実体の認識と彼への気持ちの変化、そして意識的に「共同体」に留まって与えられた懲罰に服したことに明きらかに見てとれるが、それを示すもう一つの重要な裏付けは、懲罰を受け入れた時の彼女の態度である。第2章で処刑台の上でさらしものになるために監獄から姿を現わす場面で、彼女は自分を連れ出そうとする看守の手を払いのけて「自分の自由意思によるかのように、戸外へ足を踏み出した」⁽⁴²⁾と述べられている。即ち、彼女は確かに「共同体」の懲罰に忠実に服してはいるが、それは決して以前のような「隷属的で盲目的状態」を意味しているのではないのだ。あの無邪気な乙女のような信者としてではなく、自立した主体的な個人として意識的に罪を認め、「共同体」に従うことを選択したことが、この一節からも読みとれる。このような意識段階への到達は、どのような形で獲得されたのであろうか。

プシケーの場合、ランプで暗闇の楽園を照らし出すという行為は、ノイマンによれば「自我意識」としての彼女の誕生を意味し、その意識の光のもとで彼女はエロースと個人的な出会いを果たす。その時、彼女は思わずエロースの矢で自分を傷つけるが、それは自発的な「第二の処女凌辱」⁽⁴³⁾を意味し、それによって彼女は「もはや一人の犠牲者ではなく、積極的に愛し得る女性となる」⁽⁴⁴⁾という。換言すれば、彼女はエロースを「獣」とみなす「男性をいみ嫌うような母性的な面」⁽⁴⁵⁾を超越すると共に、彼を「高貴な夫」とみなす「何も知らない子供っぽいほど無邪気な少女」としての面からも脱却し、「自らの内に統合し得た一人の力ある存在」⁽⁴⁶⁾として「高貴なものと低俗なものを持ち、しかも両者を結合させているエロース」⁽⁴⁷⁾を認め、彼を愛するようになるというのである。ノイマンは、この体験を「今こそ、真に愛する時がきたのだ」⁽⁴⁸⁾(傍点は著者)と要約する。ヘスターの場合も、罪が発覚した後の彼女の態度によって同様のプロセスがあったことが推測されるのではないだろうか。既に見てきたように、彼女は妊娠という結果を命がけで意識的に引き受け、どのような形の逃亡も企てることなく、ディムズデイルとの出会いのもたらしたものをひたすら背負って堂々と生きぬくのである。しかもその根底には、すべてに優先する彼への確固とした愛があった。確かに彼女は「真に愛する」女性へと成長しているのである。従って既に述べた葛藤を経てディムズデイルへの反逆である姦通に至った時、彼女が経験したものは、プシケーの場合と同じくその葛藤を解決し、彼女を反逆からあれほど過酷な試練にも耐える「真の愛」に到達させた心理的な変容、あるいは新しい視点の獲得であったと言えるのではなかろうか。彼女は、もはや圧倒的な「父権的ウロボロス」に屈服し、彼を神の如く崇拜するあの無邪気な乙女のような盲目的な子供っぽい信者ではない。既に彼女は、「強烈な動物性の性質」等の低俗な面を含む生身の男性としての彼を知ったのであるから。また同時に彼女は、男性への敵意に満ちた「太母」性に支配されて、彼を女性を飲みこむ「怪物」としてヒビズ女史のように反発することもない。なぜなら、彼の神に対する純粋な信仰心と自己放棄という、支配欲とは無縁の謙虚で高貴な面をも深く知ったであろうから。「父権的ウロボロス」に盲目的に屈服してディムズデイルを「神」とみなす視点も、逆に「太母」に支

配されて「怪物」をみなす視点も、共に現実の彼を歪曲する一方的な見方に過ぎない。現実の彼は、エロース同様、「高貴なものと低俗なものを持ち、しかも両者を結合させている」存在である。ヘスターは、まさに「父権的ウロボロス」と「太母」の支配する「自己保存」の段階を共に超越し、両者の視点を統合して新たな視点を獲得し、両者のひきおこした葛藤を新たな視点によって解決することができたと言えよう。彼女がディムズデイルの正体を見きわめることによって無意識的な二つの段階を超越し、新しい視点を獲得したとすれば、その新しい視点とは意識的な段階であり、彼女はその意識の光の中で彼との個人的な出会いを果たし、意識的、主体的な愛を獲得したと考えられる。しかし、既に述べたように、彼女にとって暗闇の樂園はもう一つあった。チリングワスとの結婚生活である。彼女が新しい視点を獲得し、意識的段階に到達した時、その意識の光は、チリングワスとの樂園をも同時に照らし出したはずである。その光の中で彼女が出会った、もう一人の樂園の主たる彼の正体は、どのようなものであっただろうか。第14章で、彼が昔の自分を「他人には思いやり深く、自分には求めるところの少ない——親切的な、誠実な、公平な、たとえ暖かくないにしても実直な、愛情を持った男⁽⁴⁹⁾」と回想し、ヘスターが、それ以上であったと応じる場面がある。しかし、その反面、彼は、自分の知識欲が飽くまで利己的なものであって「人類の幸福の増進のため⁽⁵⁰⁾」という目的はつけたしに過ぎないとも言っているし、自分が彼女に「冷たい⁽⁵¹⁾」と映っていたことも知っている。即ち、彼は、表面的には平凡な良識人であったが、実は利己的で冷酷な本性を隠していたことを自らもらしているのだ。それは、第3章で彼が処刑台に立つヘスターに気づいた時の利己的で冷静な反応や、第4章で二人きりで再会した時の冷静さ、そして彼のたくらんだ復讐行為の残忍な方法に明確に表われ、ついには彼を「悪魔」の域にまでおとしめていくのである。意識の光の中で、ヘスターがそのような彼の本性の一端を見ぬいたであろうことは、再会の場面で「少しも愛は感じませんでしたし、そんなふりもしませんでした」と述べることから想像される。また「彼女の心に分別の無かった時に自分の側に居るのが幸福だと考えるように彼女を説きつけたこと」のゆえに、彼への憎悪を吐露する場面からは、彼の利己的な支配への憎悪がにじみ出ている。従って、良識人としてのペルソナとは裏はらに、過去の結婚生活という樂園の主として彼女を飲みこんでいた知力の「神」であり、「怪物」でもあった彼は、今や単なる利己的で冷酷な知識人という等身大の姿を、彼女の意識の光の中に現わしたのである。等身大のディムズデイルの中に天上的なものを慕う「高貴なもの」と動物的特質といった「低俗なもの」を統合させている姿を見出した彼女であったが、チリングワスの中には、地上的で利己的な本性という「低俗なもの」しか見出せなかったに違いない。D.H. ロレンスが述べている如く、「彼はキリスト教徒ではなく、おのれを空しくして高きを慕う心も備えていない。第一、高きを慕うなどという柄ではない。…チリングワスは知的な伝統を保ち続けている。ディムズデイルのような崇高な高みを慕う新しい人間を黒くいびつな敵意に駆られて憎むのだ。」⁽⁵²⁾（傍点は著者）彼らはこのように対照的であり、いわばチリングワスはディムズデイルの「影」であると言えよう。彼女は意識の光を灯し、二つの暗闇の樂園とその主達を同時に照らし出し、その結果、愛によってディムズデイルを受入れ、その「影」とも言えるチリングワスを憎悪によって拒絶するのである。暗闇の樂園の正体を見るということは、その暗闇に捕われていた自分自身を解放すること、即ち無意識の混沌の中から「自我—意識」として誕生することである。換言すれば、それは無意識の混沌の世界を「原父」＝「父権的ウロボロス」と「原母」＝「太母」とに解体し、両者から我が身を切離す「原両親の

しかしながら、彼はこのような彼女の「真の愛」を喜んでいたのであろうか。彼にとって姦通がもたらしたものは、不本意な楽園追放であり、「罪の絆」という言葉にも拘らず、姦通自体の持つ意味が当事者の二人にとって大きく喰い違っていることは、これまで見てきた通りである。姦通は彼にとっては「太母」に支配されて犯した「情熱の罪」に過ぎなかったが、彼女にとってはより高い意識性を求める第一歩であったのだ。この二人の心理発達上のギャップが、既に述べた罪の結果への対応の喰い違いとなって表われたのであるが、彼女の「真の愛」に対する二人の認識の違いにも、そのギャップが表われている。プシケーは、ランプが照らし出したエロースがまだ眠っている間に「原両親の分離」を為し遂げ、「自我一意識」としての誕生と真の愛の獲得へと到達した。そしてその愛でエロースを内面化していくわけだが、ノイマンは「彼女の心の愛のイメージとなった内なるエロースは、……眠っているエロースの、実際にはより高尚な、しかも目に見えない姿」であり、「プシケーに内在化された、より偉大な目に見えないエロースは、彼女のランプの光によって明らかにされ、油のしたたりによって燃された彼の小さな目に見える受肉と、当然葛藤せねばならない」と述べる。⁽⁵³⁾そして現実の彼を「より低いエロース」あるいは「アフロディーテのエロース」と呼び、プシケーに内在化された彼を「より高いエロース」あるいは「プシケーのエロース」と呼んで区別し、彼女が前者を後者へと変容させて「二重のエロース」を統一しなくてはならないことに言及している。⁽⁵⁴⁾眠っていたエロースがこぼれたランプの油によって火傷を負って目覚めた時、彼は彼女の反逆行為とその結果である意識段階への到達、そして意識的な個人としての出会いに基づく主体的な愛とに深く傷つき、彼女を捨てて立ち去るのである。なぜなら、ノイマンが述べる如く「自分を神であるとみなしている男性にとっては、彼女を暗闇の中で所有することこそ、望ましかったのだ。彼女は、単に彼の夜の伴侶にすぎず、世間から引込んで彼の⁽⁵⁵⁾のため

のみ生活し、彼の昼間の存在、彼の現実と神性を共にする恵みに浴してはいなかったのだ」からである。このように、愛しているつもりではあっても、彼女を意識的存在から遠ざけて「非存在」の内に支配することを望むのは「より低いエロース」であり、彼は彼女の勇敢な反逆行為によって無理やりに楽園から追放されたのであり、傷ついただけで覚醒させられたわけではない。「変容が行なわれるのは、エロースの意図したことではなく、むしろ、彼が受動的に経験するところのものである」⁽⁵⁶⁾とノイマンは述べるのだが、火傷を負って目覚め、恋人の反逆に傷ついて彼女から逃亡するという一連のプロセスは、そのままディムズデイルにあてはまるのではあるまいか。ヘスターが「父権的ウロボロス」に飲みこまれて無邪気で従順な信者であった間、彼は彼女の存在を含む「ウロボロス」的な「共同体」の楽園と一体化していた。彼女が「太母」的な反逆を企てた結果、「原両親の分離」を為し遂げ、「自我一意識」として主体的に彼を愛するようになった時期には、彼は「太母」の支配下にあつて性的な陶醉に圧倒されており、それはエロースが何も知らずに眠っていた間に相当する。ならばエロースを目覚めさせ、恋人の裏切り行為を認識させた火傷は、ディムズデイルにとっては、ヘスターの出産の決意と実行ではなかろうか。というのも、対等の個人としての彼との出会いの結実である子どもを出産することによって、彼女は罪の結果を意識的に引き受け、命がけで彼への意識的な愛を貫く覚悟であることを示したからである。このような彼女の意識性の獲得が、彼と「太母」との絆を切断し、その結果、彼もまた「太母」の次の段階である「原両親の分離」に進まざるを得ない。しかし、既に見てきたように、ヘスターによって否応なく押しやられた心理的発達であるがゆえに、その「原両親の分離」は不完全であり、「より低

いエロース」と同様に彼の受動性は読者の目にも明らかである。彼にとって彼女との結びつきは、「自然の原理」、「感覚的な陶醉の原理」⁽⁵⁸⁾に基づいた「太母」段階の結びつきに過ぎない。「より低いエロース」同様、彼はヘスターを無意識的な暗闇の世界に留めておきたいのだ。彼は、夜の暗闇の世界に「太母」として君臨する彼女には魅せられても、意識を獲得した主体的な一人の人間として昼間に姿を現わした彼女とは、まだ関係を持つことができない。心理発達という観点から見れば、彼は巨大な「太母」像から人間的な関係を持つことの可能な「アニマ」像を分離して意識的な対等の関係を持つには、まだ幼すぎるのである。その未熟さのゆえに、ヘスターの意識的な愛を受入れることができず、「より低いエロース」同様にその愛から逃亡するしかないのである。かといって、彼は「太母」段階のヘスターとの結びつきに固着することもできない。なぜなら、「太母」段階の暗闇の楽園は、彼女の英雄的な「原両親の分離」によって意識の光に照らし出され、消滅してしまったからである。しかも、「太母」に引かれてはいても、エロース同様に否応なく目覚めさせられた彼は、彼女の「太母」的反逆の意図に脅威を感じる。従って、ディムズデイルは、「自我—意識」として楽園から追放されたにも拘らず、その未熟さのゆえに完全な独立へと前進することもできず、かと言って、ヘスターの成長と自分自身の「太母」への恐怖と抵抗ゆえに「太母」段階に後退することもできない。彼は、ヘスターのもたらした「原両親の分離」状況に押し出されたまま立ち止まらざるを得ない。このような未熟な彼を、ノイマンにならって「より低いディムズデイル」と呼ぶならば、彼女が「共同体」に留まった理由が納得できる。彼女は「真に愛する」女性として、彼を「より高いディムズデイル」へと変容させなければならないのである。それは、とりも直さず彼女の「真の愛」の実現を意味するのであるから。「自我—意識」を獲得した女性としての「真の愛」に目覚めた以上は、全存在をかけてこの愛を実現すべく戦うのが、プシケーと同様に「真に愛する」女性ヘスターの使命であろう。さもなければ、彼女はアイデンティティーを放棄し、再びもとの「父権的ウロボロス」段階の「怪物に飲みこまれたいけにえ」としての「非存在」に退行するか、あるいは男性への敵意に満ちた「太母」の支配下にまでも退行しなければならないのであるから。即ち、本稿の初めに言及した、彼女が「共同体」に留まって命と引きかえであってもなお求めようとした「何か」とは、「自我—意識」に根ざした「真の愛」の実現であったと言えよう。

さて次に、ディムズデイルの告白への転機となったヘスターとの森での再会を考察してみよう。彼女が彼に会った目的は、チリングワスの秘かな復讐によって投げ込まれた悲惨な状況から彼を救うために、その正体を暴露することであった。彼女がそう決意したきっかけは、12章において夜の処刑台で、ざんげの真似ごとをしている牧師に出会った際、彼の陥っている悲惨な状況に驚き、しかも「誰だあれは？ お前さんは私のために何もしてはくれないのですか？」と彼に訴えられ、昔の夫の正体を彼に隠していたことによってこの事態を招いてしまった自分の誤ちを、愛情と責任感から、できるだけ償おうと思ったからである。彼女の告白を聞き、彼女と昔の夫との一種の共犯関係に対してディムズデイルは激怒したが、彼女はひたすら許しを乞い、神への愛にも勝る彼への純粋な愛の吐露によって、チリングワスとは意図する方向が全く異なることを訴え、愛する人の許しを得た。ここで、ディムズデイルにとって、「太母」としての彼女のイメージが大きく変化したわけである。前稿で考察した通り、それまでの彼女に内在する否定面は、性的魅力によって彼を「息子—自我」から「息子=愛人」へと退行させようとする敵意ある「恋する太母」イメージを持っていた。(図[Ⅱ]の(1)参照)ところが、彼がチリングワス

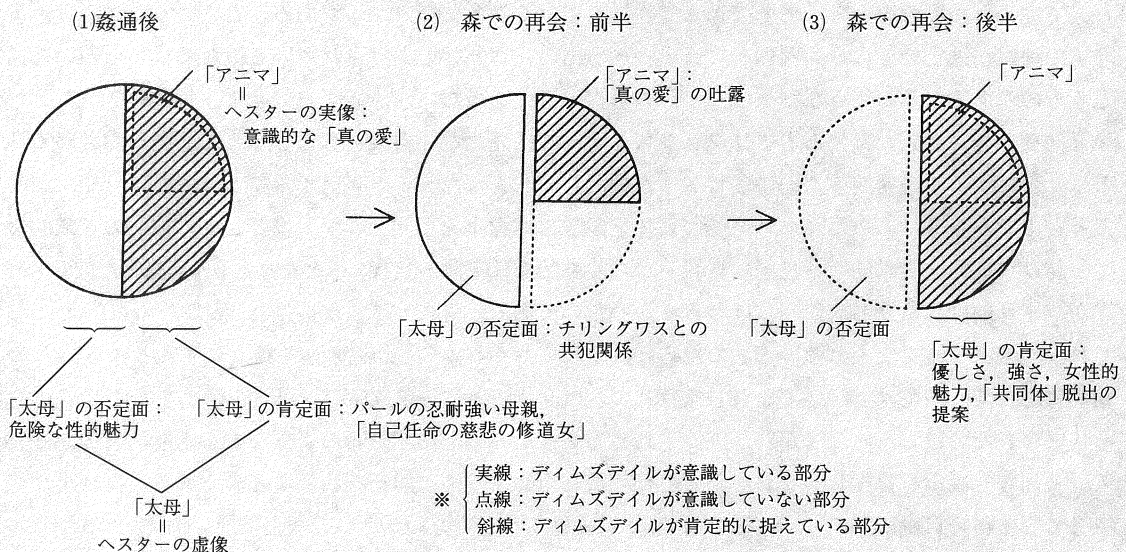
の正体を知ったこの時点で、敵がヘスターではなく彼女の昔の夫であることを知り、なおかつ彼女の純粋な愛を訴えられて、彼女の「太母」像から破壊的、否定的な面がチリングワスと結びついて分離していったのである。「太母」像から最も邪悪な部分が切り離されると同時に、彼女の性的魅力から敵意が脱落し、個人的女性としての純粋な愛と共に、残る「太母」の肯定面と結びついて意識層により近い「アニマ」元型へと変質していこうとする。彼女の実体であり、彼にとっては対等の愛情関係を結ぶことの可能な「アニマ」像が、「太母」像から完全に切り離され、その「アニマ」の意志である彼女の意識的な「真の愛」が今や彼に認識され、受け入れられるかに見える。(図[Ⅱ]の(2)参照)「私達のしたことに、神聖なものがありました」という有名な彼女の言葉は、従来よく言われてきたように、姦通行為を肉欲を含む自然な人間性の発露として捉え、それ自体に神聖さを見出そうとする言葉として解釈されてきた。しかし、既に何度も述べた如く、姦通がその根底に意識への渴望を持ち、結果として「原両親の分離」による「自我—意識」の誕生と、それに根ざした「真の愛」の獲得をもたらしたとすれば、この彼女の言葉は違った解釈を必要とする。即ち、「神聖なもの」とは、「自我—意識」への到達と「真の愛」の獲得を意味することになる。むしろ、以上のようなプロセスは、ヘスターにあてはまることであって、ディムズデイルにしてみれば、全く同じ意味を持つはずはなく、彼の同意は、彼女に押し出された形で「自我—意識」としての消極的な自立を果たした彼の、受動的な同意と理解すべきであろう。いずれにせよ、ヘスターにしてみれば、自立した意識的な存在となった自分の実体が彼に受入れられ、手と手を握り合い、並んで腰をおろした二人の間に「真の愛」が実現し、「神聖なもの」として再確認されたならば、それは既に言及した「より低いディムズデイル」を「より高い」彼へと変容させ得たことになり、彼女のすべての希望はかなえられたと言えよう。例えば、ここで彼が自ら主体的に罪の告白を決意すれば、彼女は喜んで彼を支えたであろうし、その結果極刑が待っていようと喜んで運命を共にしようとしたであろう。そうなれば、彼は「共同体」と神の前で罪を告白することによって、姦通という外的な形式を罪として悔い改めると同時に、彼女との「真の愛」という内的な実体は「神聖なもの」として受入れ、罪の絆という形で来世まで維持していくことになるからである。このような結末は、第5章で彼女が逃亡せずに「共同体」に留まった理由の一つとして挙げられている彼女の秘めた願いと通じるものがある。そのような結末は、一つの選択の例に過ぎないが、いずれにせよ、肯定的な「アニマ」像と結びつき、邪悪な敵であるチリングワスと戦って独立した「自我—意識」として勝利をおさめることは、敵による魂の拷問のためにリビドーが枯渇してしまったディムズデイルにとって、不可能なことだったのである。いったんヘスターの実体を認識し、肯定的な「アニマ」像としての彼女の意識的な愛と結びついて、受動的な「息子—自我」から能動的な「英雄—自我」へと変容するかに見えた彼であったが、主体的に敵に立ち向かうには至らなかったのである。それどころか彼は、「私のために考えておくれ、ヘスター！あなたは強い。私のために決定しておくれ！」⁽⁵⁹⁾と幼児の如く彼女にすがりつき、その願いに応えて、彼女は「深いまなざしを牧師の目に向けると、一人ではもうほとんどまっすぐには立ってられないどうちひしがれ、圧倒されてしまった心の上に、磁石のような力を本能的に働かせ」⁽⁶⁰⁾て「共同体」脱出を提案し、なおも一人で行くことをしる彼に同行を約束するのである。再び喜びを感じている自分自身に驚いている彼の前で、「過去はふり返らないことにしましょう。…この印と一緒に、私は過去をもとに返し、無かったのと同じにさせていただきますわ！」⁽⁶¹⁾と言うと、彼女は胸から緋文字

を投げ捨て、かた苦しい帽子をとると、豊かな黒髪が肩の上にたれさがると共に、女性らしい豊かな美しさがよみがえってきた。17章から18章にかけての彼女の愛情の吐露、「共同体」脱出の提案と彼への強引な説得、そして過去を否定し、緋文字を投げずて、豊富な美しさを露わにする場面に至る一連の彼女の言動が、彼女を恋愛至上主義のロマンチスト、「アメリカのイヴ」、過去を切り捨てるエマソンの超絶主義者、あるいは「誘惑者」として読者や批評家に強烈な印象を与えてきた。だが、この場面を別の視点から見ることでもあるのではなからうか。

彼女の能動的な言動と、そのような積極的な強い彼女にひたすら子どものようにすがりつき、説得に動かされる彼の姿は、彼女がいったんは明確な輪郭をとりかけた「アニマ」像から再び「太母」へと逆戻りし、「太母」ヘスターと彼女に支配される「息子＝愛人」ディムズデイルという図式が再現されたことを示している。しかしながら、既にチリングワスの邪悪なイメージと結びついて「太母」の敵意に満ちた否定面は切り離されており、残ったのは「息子」を優しく養育し保護する肯定面としての「良き母」である。ディムズデイルが「私は彼女と一緒にいてくれなくてはもう生きていけない。彼女の不屈の力はあのように強く、慰めはあのように優しいのだ!」と叫び、彼女を「私の良い天使」と呼ぶことも、彼にとって彼女が姦通の発覚後に彼を悩ませた否定的な恋する「太母」ではなく、肯定的な優しい「太母」として捉えられていることを裏づけている。このような「太母」の無限に愛し、養育する肯定面は、対象の態度に左右されることのない自己犠牲を伴う彼女の意識的な「真の愛」と重複する部分であって、この7年間には、罪の相手としてのディムズデイルの名を告白することの拒否や、悪意を秘めた小悪魔のような面もある捉えどころのないパールへの忍耐強い母性愛、そして「自己任命の慈悲の修道女」⁽⁶³⁾としての愛と奉仕等となって表出した面である。こうして、一度は彼によって認識されかけた彼女の実体でもある「アニマ」像は、彼にとって肯定的「太母」像へと退行してしまう。(図〔Ⅱ〕の

図〔Ⅱ〕

——ディムズデイルの内面におけるヘスターの変貌——



(3参照) ここに至る彼の内面におけるヘスターのイメージの変化を図示すると次の図〔Ⅱ〕のようになる。

ディムズデイルにとってこのような彼女との関係の変化は、たとえそれが「太母」の肯定面に向かったものであっても退行には違いない。その点から言えば、確かにこの場面の彼女を「誘惑者」と捉えることもできよう。しかし、上図にも示されているように、「アニマ」としての「真の愛」の吐露がそのような役割に先行していることを忘れてはならない。彼女が逃亡を提案したのは性的情熱のためではなく、飽くまでも独立した自我として自力で敵と戦うことができず、彼女に助けを求める彼を、敵から守ろうとしたためである。彼の精神的危機に対する彼女の責任感を示す例は他にも見られる。既に14章で昔の夫の正体を隠していたことを後悔する彼女は、彼の正体を告げることがたとえディムズデイルの死につながったとしても、現在の発狂寸前の衰弱した空虚な状態よりましだ、と断言している。また森での再会において、脱出を渋るディムズデイルに「あなたの生命をあのように悩ましてきた責め苦の中に、なぜ更に一日もためらっていらっしゃるのです！——その責め苦のためにあなたの意志も行動も鈍くなり——⁽⁶⁴⁾ ざんげする力さえなくなっておしまいになったのに！」と嘆く。「ざんげ」することもできないほどに自我の衰弱した彼の空虚な状態に対する彼女の強い責任感と同時に、この言葉は「ざんげする力」としての「自我—意識」の価値と「ざんげする」ことの意義を彼女が脱出よりむしろ高く評価していることを我知らず語っているのではなからうか。従って彼女の脱出の提案と説得は、「太母」としての「誘惑」ではなく、独立した「自我—意識」として主体的に「ざんげ」をし、自分のアイデンティティーを主張することによって敵と対決する力の無い現在の彼を、何とか敵の手から解放するために「アニマ」としての彼女に残された次善の策だったのではなからうか。にもかかわらず、それを「太母」として受けとめる彼との間に大きなギャップがあることは、注目に値する。しかも、彼女の説得が、胸の緋文字を投げ捨て、過去を否定し、帽子をとって豊かな美貌を誇示する段階にまで進んでくると、そのギャップはますます拡大されていくのである。この時点までくると、彼女の意図が彼の救出と保護ばかりではないことが明らかになってくる。そもそも彼女が「共同体」に留まった目的は、姦通の結果として到達した意識的な「真の愛」を実現することであった。換言すればそれは未熟さゆえにそのような「真の愛」に応えることのできない現実の「より低いディムズデイル」を、彼女の内に内面化された、自立し成熟した「より高いディムズデイル」へと一致させ、両者を統合した彼と改めて結びつくこと、即ち彼女が「太母」的な敵意ゆえに破壊した彼との原初的な絆を「真の愛」によって意識的な絆へと修復することであった。そのため彼女は、自らの意識性を彼の「高きを慕う」天上的な要素に合致させることによって受入れてもらえるように、彼が逃げ込んだ「原父」＝「共同体」の原理に意識的に従い、与えられた困難な試練に耐え、天上的な意識性を高めてきたのである。そのようなヘスターの姿が、罪の子パールの養育に打ちこむ母として、また「自己任命の慈悲の修道女」としての自己抑制された姿であろう。こうして彼女は序々に「共同体」の尊敬を獲得し、緋文字「A」の意味も‘Adultery’あるいは‘Adulthood’から‘Able’へと変化するに至ったのである。ついには「共同体」は、緋文字を彼女の胸からはずそうという動きさえ見せはじめ、彼女が罪を犯す以前の「共同体」の一員としての社会的地位に復帰できる可能性も生まれつつあった。そうなれば彼女も来世で愛する人と罪の絆によって結ばれる、という願いを抑圧するまでもなく、現世で教区牧師である彼と新たに精神的な絆を結ぶことも可能であろう。その

ような現世における彼との絆の修復の可能性と来世における希望に彼女が到達しようという段階になってさえ、現実の「より低いディムズデイル」は、ペルセウスのように勇敢に「竜」と戦い、自立した「英雄—自我」として「アニマ」であるヘスターを解放することはできず、逆に彼女を「太母」の枠の中に再び閉じ込めてしまうのである。しかしながら、そのような彼女に対して彼女は反発するどころか、苦難と忍耐の7年間を通じて、彼の昼間の実体である天上的な部分を分かち合うにふさわしい女性となり、意識的な「真の愛」を受入れてもらうために忍耐を重ねて修得してきたすべての精神的な成果を迷うことなく捨て去り、女性的な魅力を余すところなく誇示して「より低いディムズデイル」との絆を結ぶのである。いや、そればかりではない。胸の緋文字と共に過去をなかったことにする、という彼女の言葉は、姦通の事実を帳消しにするという意味であるに留まらず、「原両親の分離」としての姦通をひき起こした「太母」的な敵意も、また姦通によって到達した「自我—意識」の獲得とそれに支えられた意識的な「真の愛」までも帳消しにすることに他ならない。帽子をとって豊かな女性らしさと美貌をとりもどした彼女には、青春と共に「乙女の頃の希望」⁽⁶⁵⁾までもよみがえってきたと述べられている。即ち、彼女はここで「共同体」における過去ばかりかチリングワスとの暗闇の楽園さえもとびこえて、「太母」に保護された「自己保存」段階の乙女の心理にまで退行しているのである。そして再び乙女にたち返った彼女は、ディムズデイルに「無邪気な子どもっぽい女性」としての自分自身を初めて捧げるための「死の結婚」を再現しようとしているのである。彼との最初の絆は、チリングワスとの完全に受動的な「死の結婚」に続く「暗闇の楽園」を受けついだものであった。しかしこの場面に見られる新たな絆は、再度の「死の結婚」をディムズデイルへの愛ゆえに意識的に自ら進んで行なうことによって、結ばれるのである。それは、「怪物に飲みこまれる」恐れや「非存在」の危険性を充分わきまえた上で、敢て「自我—意識」としての自分自身を意識的に捨て去ることなのである。即ち彼にとっては「太母」の肯定面への退行であった彼女の変貌は、彼女自身からすれば、「死の結婚」に始まる「父権的ウロボロス」への退行であったと考えられる。

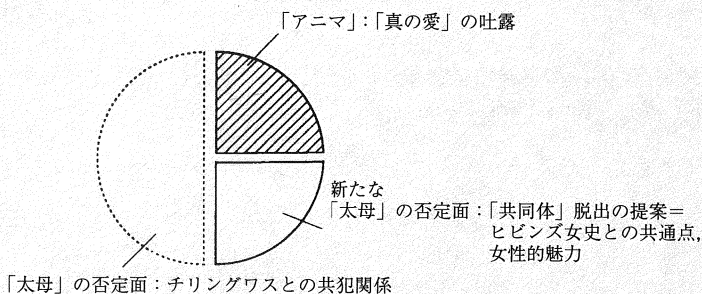
こうしてディムズデイルに受入れられる質の意識性を高め、彼の二重の存在を統合することによって彼との絆を修復し、意識的な「真の愛」を実現せんとした彼女の悲願は、彼の実状に合わせて「より低いディムズデイル」を救出し、彼との絆を結ぼうと切望するあまり、それまでに彼女が獲得した成果ばかりか自分の「自我—意識」さえも捨て去り、「死の結婚」に始まる「父権的ウロボロス」段階の自己放棄へと意識的に退行するという結末に至ったのである。これは彼女にしてみれば断じて誘惑ではなく愛ゆえの逸脱、あるいは失敗と考えるべきであり、いわば「自我—意識」の「自己犠牲的な自殺」とも呼ぶべき逆説的な行為ではなかろうか。これもまた、最後の課題に直面したプシケーの対応と酷似している。彼女はアフロディーテの命令を受け、地下の冥界の女主人たる女神ペルセポネーから美の軟膏を借りてくるが、エロースに受け入れられんがために女神の美を我がものとしたいという気持ちに勝てず、ついに箱をあけてしまい、死のような眠りに襲われて倒れる。ノイマンは、彼女のこの行為を次のように解釈する。これは、プシケーを「男性を愛することのない、単なる乙女の不妊のこわばった美しさ」⁽⁶⁶⁾、「死の美」に陥らせ、「自分自身に対するナルチシズム的愛に溺れる女性」⁽⁶⁷⁾としてエロースからひき離そうとする「太母」アフロディーテのたくらみであった。しかし実際は、彼女は「知識よりも美しさを選ぶことによって…むしろ自分の本性の中にある女性性を再結合する」のであり、その美しさは

「愛する者、エロースのために美しくありたいと願い、他に誰も考える余地のない美しさ」であった。⁽⁶⁸⁾彼女は、「自分の愛を告白し、エロースとの個人的な出会いをしっかりと確認する」と同時に、「あらゆる——男性的な——理性に対抗して…自分の原初的な女性性を露わに」する。⁽⁶⁹⁾即ち彼女は、「自らを与え、彼のために獲得してきた一切のものを、ことごとく与え尽くす身がまえ」をもって「エロースとの死の結婚」を遂行し、彼女の「意識される愛」は「死よりも強く、喜んで生命を捧げ、死の花嫁として愛するエロースを引き受ける愛」なのである。⁽⁷⁰⁾そしてそのような愛ゆえの「逆説的な女性の失敗」が、「エロース自身を介入させ、彼を少年から一人の男性へと作りかえ、火傷を負った逃亡者から一人の救済者へと変容させ」、逃亡していた彼は彼女を救い出し、ゼウスの許しを得て彼女との結婚を実現させるのである。⁽⁷¹⁾即ちプシケーは、「女性性と愛の完成を通じて…エロースの完全な男性性を呼び起こす」のである。⁽⁷²⁾

むろんデイムズデイルとヘスターの場合は状況はずっと複雑であり、彼は初め愛ゆえの「失敗」に陥った彼女を救うどころか、彼女にひきずられる形で逃亡を約束し、それまでとは打って変わった生命力溢れる様子で帰途につく。しかし途中で「共同体」の構成員を象徴するような人物達と次々に出会うが、中でも「魔女」であるヒビンズ女史との出会いは、自分が悪魔と契約を結んだのではないかと彼に自問させる。しかも作者自身、それを裏付けるように、彼は「それと似たような取引き」をし、「幸せの夢にたぶらかされて…恐ろしい大罪として承知しているものに彼は自分をゆずりわたしてしまったのだ」と述べる。⁽⁷³⁾悪魔との契約の不安は、書斎にたどりついた途端に彼を訪れたチリングワスとの再会で一挙に現実味を帯びる。その結果、一瞬の内に自分の置かれた状況を悟った彼は、前稿で述べたように「竜との戦い」において象徴的な「父殺し」と「母殺し」を遂行し、一転して勝利のうちに死んでいくのである。従って、いったんヘスターを「アニマ」像から肯定的「太母」像へと押し戻した彼であったが、ヒビンズ女史との出会いによってヘスターとの脱出の約束に「太母」の否定的要素の存在を感知し、チリングワスとの再会がそれを決定的認識にまで高めた結果、ヘスターのイメージは再び変貌を余儀なくされる。即ち、彼は彼女との再会の後半において「太母」の肯定面と捉えていた彼女のイメージから、彼を「共同体」脱出へと誘った部分を切り離し、再会の前半に彼女が吐露した意識的な「真の愛」を中心とする「アニマ」像のみを残したに違いない。なぜなら、次に彼女と出会う新知事就任の祝日には、彼は脱出を拒否することによって彼女の内なる「太母」性を拒否すると同時に、残った「アニマ」像を聖母マリアのイメージにまで高め、自ら彼女との絆を公認したばかりでなく天なる父神にも受け入れら

れるべき役割を彼女に与えることによって、彼女の愛に報いたからである。この時点での彼女のイメージは、図〔Ⅱ〕の(3)に続いて次の(4)のようになる。こうしてエロースがプシケーの愛に動かされ、「死の花嫁」の状態から彼女を救い出し、彼女との意識的な絆を新たに結んだよ

図〔Ⅱ〕 (4)



うに、ディムズデイルもヒビズ女史やチリングワスの介入を必要としたにせよ、ヘスターを愛ゆえの退行から救い出し、彼女の意識性とそれに根ざした「真の愛」を聖母の次限にまで高め、彼女のその部分と新たな絆を結んだと考えられる。それは同時に、彼がエロースの如く「傷を負った少年という状態から脱却して一人前の大人であり、また救済者へと変わってゆく」ことであり、「英雄—自我」としての独立であった。まさにヘスターは「失敗しなくてはならない」し、「この失敗こそが、結果的には、彼女に勝利をもたらした」のである。

以上でヘスターとディムズデイルの間に心理発達上のギャップがあり、ヘスターが先行して彼をひっぱる形で、彼の「英雄—自我」としての発達プロセスを推し進めていることが明らかになった。従って受動的な彼を発達へと押しやる彼女の力は、安定した静的なものではなく、彼女自身の女性的な心理発達プロセスが彼の男性的発達と不可分の関係を持ちながらダイナミックに進展するにつれて、彼女の女性的な力も変容を続けるのである。本稿の最初に述べた如く、『緋文字』は、西洋における男性的自我発達プロセスを枠組みとして男性的価値の世界の勝利を描いた作品であるが、その男性的プロセスと不可分に結びついてそれを支えるのは、実質的には女性的心理発達プロセスのダイナミズムなのである。換言すれば、ヘスターの女性的心理発達なくしては、ディムズデイルの男性的自我発達、即ち「英雄」への成長はあり得なかったのである。プロットを進展させるのがこれら二つの発達のプロセスの必然的な相互依存にあるとすれば、作者が訴えたかったのは、両者の統合の必要性と言えるのではなからうか。

<注>

- (1) 拙論『ディムズデイルの精神的変貌—自我発達の元型的プロセスについて—』（鹿児島女子短期大学「紀要」第26号, 1991）
- (2) ホーソン, 刈田元司訳『緋文字』（旺文社, 1967）, p.80.
- (3) *Ibid.*, p.151.
- (4) *Ibid.*, p.153.
- (5) 大橋健三郎, 『アメリカ文学論集—人間と世界—』, (南雲堂, 1977), p.425.
- (6) ホーソン, *op. cit.*, p.196-7.
- (7) *Ibid.*, p.180.
- (8) エリヒ・ノイマン, 『意識の起源史（上）』, 林道義訳（紀伊国屋書店, 1984）, p.149.
- (9) ホーソン, *op. cit.*, p.251.
- (10) *Ibid.*, p.133.
- (11) *Ibid.*, p.174.
- (12) *Ibid.*, p.104.
- (13) *Ibid.*, p.84.
- (14) エリヒ・ノイマン, 『アモールとプシケー』, 河合隼雄監修, 玉谷直実・井上博嗣共訳, (紀伊国屋書店, 1989), 以後, プシケーとエロースに関するノイマンの見解を要約した部分はすべてこの版による。
- (15) *Ibid.*, p.81.
- (16) ホーソン, *op. cit.*, p.71.
- (17) *Ibid.*, p.218.
- (18) *Ibid.*, p.218-9.
- (19) *Ibid.*, p.219.

- (20) *Ibid.*, p.91.
- (21) *Ibid.*, p.218.
- (22) *Ibid.*, p.90.
- (23) ノイマン, *op. cit.*, p.86.
- (24) *Loc. cit.*
- (25) ホーソン, *op. cit.*, p.218.
- (26) *Ibid.*, p.219.
- (27) *Ibid.*, p.90.
- (28) *Ibid.*, p.276.
- (29) *Ibid.*, p.277.
- (30) *Loc. cit.*
- (31) ノイマン, *op. cit.*, p.91.
- (32) *Loc. cit.*
- (33) ホーソン, *op. cit.*, p.274.
- (34) *Ibid.*, p.275.
- (35) *Ibid.*, p.276.
- (36) *Ibid.*, p.275.
- (37) ノイマン, *op. cit.*, p.85.
- (38) *Ibid.*, p.87-8.
- (39) *Ibid.*, p.87.
- (40) *Ibid.*, p.85.
- (41) *Ibid.*, p.88.
- (42) ホーソン, *op. cit.*, p.64.
- (43) ノイマン, *op. cit.*, p.91.
- (44) *Loc. cit.*
- (45) *Loc. cit.*
- (46) *Loc. cit.*
- (47) *Loc. cit.*
- (48) *Ibid.*, p.90.
- (49) ホーソン, *op. cit.*, p.214.
- (50) *Loc. cit.*
- (51) *Loc. cit.*
- (52) D・H・ロレンス, 酒本雅之訳, 『D・H・ロレンス—アメリカ古典文学研究』, (研究社, 1974), p.162-3.
- (53) ノイマン, *op. cit.*, p.92.
- (54) *Loc. cit.*
- (55) *Ibid.*, p.187.
- (56) *Ibid.*, p.93-4.
- (57) *Ibid.*, p.97.
- (58) *Ibid.*, p.105.
- (59) ホーソン, *op. cit.*, p.246.
- (60) *Ibid.*, p.247.

- (61) *Ibid.*, p.254.
- (62) *Ibid.*, p.253.
- (63) *Ibid.*, p.200.
- (64) *Ibid.*, p.249.
- (65) *Ibid.*, p.256.
- (66) ノイマン, *op. cit.*, p.137.
- (67) *Ibid.*, p.138.
- (68) *Ibid.*, p.142-3.
- (69) *Ibid.*, p.143.
- (70) *Ibid.*, p.145.
- (71) *Loc. cit.*
- (72) *Ibid.*, p.146.
- (73) *Ibid.*, p.144.
- (74) *Ibid.*, p.146.
- (75) ホーソン, *op. cit.*, p.279-80.
- (76) ノイマン, *op. cit.*, p.145.
- (77) *Ibid.*, p.140.

参 考 文 献

- Crews, Frederick C. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. New York: Oxford U.P., 1966.
- Hawthorne, Nathaniel, *The Complete Novels and Selected Tales*, edit. Normes Holmes Pearson, New York, The Modern Library, 1937.
- Martine, Terence. *Nathaniel Hawthorne*, New Haven, College & University Press, 1965.
- Mcpherson, Hugo. *Hawthorne as Myth-Maker: A Study in Imagination*. Canada: University of Toronto Press, 1971.
- エリッヒ・ノイマン 『アモールとプシケー』河合隼雄監修 玉谷直実・井上博嗣共訳 (紀伊国屋書店, 1989)
- エリッヒ・ノイマン 『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男共訳 (紀伊国屋書店, 1989)
- エリッヒ・ノイマン 『意識の起源史』(上)(下) 林道義訳 (紀伊国屋書店, 1984)
- ナサニエル・ホーソーン 『緋文字』刈田元司訳 (旺文社, 1967)
- D・H・ロレンス 『D・H・ロレンス—アメリカ古典文学研究』(研究社, 1974)
- レスリー・A・フィードラー 『アメリカの小説における愛と死』佐伯彰一・井上謙治・行方昭夫・入江隆則 訳 (新潮社, 1989)
- 大井浩二 『ホーソン論』(南雲堂, 1974)
- 酒本雅之 『アメリカ文学をどう読み解くか—文学史の構築をめざして』(中教出版, 1978)
- 阿部謹也 『西洋中世の男と女—聖性の呪縛の下で』(筑摩書房, 1993)
- 小山敏三郎 『セイラムの魔女狩り』(南雲堂, 1991)
- 大橋健三郎 『アメリカ文学論集—人間と世界—』(南雲堂, 1977)